

●雨天の中での七草摘み 20 名の参加で開催

天気予報の通り、弱い小雨が降り続く天気でした。しかしスタッフの皆さんは集合時間 9 時には勢揃いをされ、舞台飾りや床の水濡れ場所のふき取り、昨日作り上げたお椀への祝い札の貼り付けなどの雰囲気づくりを進めていただきました。あいにくの空模様でしたので飛び入り参加者がなく、開会挨拶に続いて昨日用意しておいた七草を刻んでお粥に投入し、炊き上がったアツアツのお粥をいただきました。40 人程度の参加があると予想していたので出来上がった七草粥、いも粥、黒米粥の 3 種類をしっかりと食べていただくことが出来ました。一通り片付いたところで余興に移り深山木亭谷野介さんの手品に続いて腹話術の披露、二人目は八幡亭黄金亭さんの紙皿まわしの芸を披露し参加者の皆さんにも皿回しをやっていただきました。伊藤さんや竹門先生が熱心に取り組んでおられました。例年に比べて少人数での取り組みになりましたが、みんなが参加出来て楽しい初顔負けの会となりました。事前準備として前日 5 日の 9:30 から「子ども書初め会」が実施。26 人が参加されそれぞれみなさんが達筆を披露されました。



七草摘みの前日準備作業 書初め



東北・青森は12年ぶりの豪雪 低気圧と寒気の襲来です 太平洋側は雨でした



朝日新聞に掲載 1月8日朝刊

●木津川ワンドの視察調査を実施 1月7日(火)

京都府自然環境課から 3 名の皆さんと里山の会から 3 名が参加しました。玉水浜の三つのワンド(下流から A・B・C、)があり、A ワンドではトラ罾がしかけられてキツネが捕らえられているのを発見しました。年末に駐車場やワンドへの通路の除草をしていただいたので調査が進めやすく行われました。B ワンドにはトンガリササノハガイの貝殻がたくさん見つかりました。また上流の C ワンドには水がほとんど消えていました。木津川本流の水位は平均 -2.6m ですので、当日の水位は -2.9m で、これから 30 cm の低下が考えられます。タナゴ類の産卵は二枚貝にうみ付けるので、水位の低下する冬は貝の中で卵が生き延びるので、C のワンドでもいる可能性があります。

●新年第1回事務局会議 1月8日(水) 参加者の皆さんの正月の話を聞きました。

大晦日に息子が帰宅したので夕食で歓迎会の食事をしました。6日に七草の参加をして、7日には農園の作業日に出席をしました。

正月には昭和の万歳農園の撮影場所探しをしました。棚倉彦神社や甘南備寺付近ではないだろうかと気づきました。孫(3歳と1歳)たちが元気にしゃべりだす相手をしました。

便秘で悩んでいるとか正月に睡眠できず体重が5kg減量になったとか体調不備の連絡があった。自身も下痢が続いている。

三が日は孫とバレーなどをした。年を重ねたので自分ペースの動きになってしまっています。5日にはお椀づくりで親指を負傷してしまいました。七草は少雨でゆっくり楽しみました。

寝正月として過ごし7日の初出勤で木幡池の水位調節に苦労しました。

年末に大変寒い中、朝まで和歌山で磯釣りを楽しみましたがカサゴなどを釣りました。帰ってきた息子などに新鮮な刺身を御馳走しました。

…などの近況報告がありました。

●年末12月24日の「ちやるむ」さんからしめ縄づくりのお礼の手紙が届きました。

放課後デイサービス ちやるむの大垣です。昨日は貴重な体験をさせて頂いて、子どもたちにとっても、職員にとっても素敵な時間となりました。ありがとうございました。子どもたちに合わせて、簡単なデザインもだしてもらい、おかげで短時間ではありましたが、集中して取り組み素敵なしめ縄ができたと思います。失敗してもやり直していたり、講師の方と一緒に取り組んでいる姿を見てとてもいい経験をさせてもらっているなど感じました。大村さんのしめ縄の説明など細かく教えもら



えたので、私たちも勉強になりました。色々、準備をしてくださりお気遣いありがとうございました。そして自己紹介では、初めての方へ小声ながらも声を出して言えていたことに驚きました。しめ縄作成後の自然遊びや、道具を使った遊びなどでは、講師の方から誘ってもらって自然と遊べていたように感じ、竹切りやハンマーは手応えになっていたようでした。帰ったあとに感想を聞くと「楽しかった」と皆満足そうでした。こちらとしてはまた参加したい気持ちでいっぱいです。今回の子たちは、今年度で卒業の子たちですが、また他のイベントでも、参加できそうなタイミングがあれば参加させていただけると嬉しいです。

「日本では昔から『川は動くもの』として治水を考えてきた」。京の川の恵みを活かす代表で、河川工学などが専門の大阪公立大学客員研究員、竹門康弘さん(67)「井手町井手」は言う。

2017年から、当時勤めていた京都防災研究所や、木津川の河川協力団体であるNPO法人「やましろ里山の会」などと協力し、井手町の木津川で伝統的な河川工法を実践して、地形や環境に及ぼす影響を研究している。

伝 統

木津川の河川敷に並ぶのは、割り竹で編んだ筒状の籠に石を詰めた「竹蛇籠」と、三角すい状の木組みの構造物「中聖牛」を設置すると洪水時に水勢を緩和して浸食を防いだり、土砂の堆積を進めたりして流れに変化をもたす。戦国大名が治水に活用したとされる伝統工法だ。

しかし明治以降、流路を固定して管理する西洋の考えが浸透し、ダムが整備されて使われなくなった。ダムには洪水を防ぐ

勝手にやましろ万博



伝統河川工法の応用で昨年から新たに作っている湾処。小魚やエビ、水生昆虫が生息している(井手町井手の木津川)

役割があるが、土砂がたまると正常に機能しない可能性がある。川を流れる土砂が減ると、堆積が進まず流路が直線となつて、多様な地形を必要とする水辺の生き物のすみかが失われる。大学で河川工学を教えるながら、流れや量など水に関する計算ばかりが書かれた教本に疑問を抱いていた。「勾配が急な日本は、土砂を加味した川作りをしていない」。土砂移動を活用した手法を探ろうと、1999年に木津川で実験を行った。

やましろ里山の会ほか(井手)

自然の力で“動く川”管理



2017年に設置した中聖牛。洪水時に流れてきた植物が根付いて一体化した(野坂真輝)

本流のそばにできる水たまりを人工的に再現しようと、河川敷にくぼみを作つて、石を詰めた鉄格子状の構造物を設置。だが出水時に土砂が思うように動かず、翌年には水たまりは失われた。自然の力で一から形成する方針に切り替え、着目したのは、先人が川の流れを観察して発展させた技。15年に竹蛇籠の編み方を職人に教わり、伝統工法の追究が始まった。

17年に初めて設置した高さ3・6mの中聖牛は土砂がたまつて傾き、大人が背伸びをすれば手が届くほどの高さ。下流側にはくぼみや土砂の膨らみ、本流とつながる池のような湾処ができて、エビや小魚が暮らす多様な地形が生まれた。

昨年からは、さらに生物が住める場所を増やそうと、水流で深いくぼみを掘るよう工夫を加えた。昨年2月に設置した竹蛇籠の下流にできた湾処には、希少種のミナメタカやキベリマメゲンゴロウ、オイカワの稚魚などが確認できた。

新たに6本の竹蛇籠を設置するため、昨年11月に講習会を開き、学生や市民と竹を割つて編んだ。長さ10mほど、石を詰めれば重さは約1・5tになるという。「河川管理は市民が関わるべきもの」。誰でも参加可能なイベントとして、地域で活動を広げる。

土砂が流れ、多様な地形を生み出す本来の川の姿を、自然の力を利用した手法で管理する未来を目指して研究を続ける。治水、利水、環境整備は本来は一体で考えるもの。根本を見直し、優れた日本独自の技術へ立ち返るべき」と力を込める。

京都新聞に掲載 1月5日 朝刊

●年の暮れに竹ペンを作っているのならこうしたものを作れないかと注文が寄せられました。

さっそく素材の矢竹を捜しましたが思うように見つけることが出来ませんでした。それならこれまでの材料で希望されているものが試作できないかと絞り込んで試作しましたら、このような品物が出来上がり、来所中の墨画の先生に使って見てもらいました。筆のような書き味や趣は難しいけれどもかなり使い手の心が表現できる面白い道具になるのではないのでしょうかと感想をいただきました。7日に注文先が来訪してくださったので、正式に契約となれば嬉しいですね。

